



科学者の社会的責任を果たすために

愛知支部・杏林大学／実験神経病理学 石井さなえ

ワールドトレードセンターのツインタワーのてっぺんからもくもくと煙が上がるのをテレビで見て衝撃を受けたのは、大学院生のころだった。これを引き金にアメリカは対テロ戦争へ突入したが、一方で報復戦争反対の動きも広まった。ニューヨークに住む友人からその署名を求めるメールがきたとき、起きている出来事は決して他人事ではないのだと実感した。

日本でぬくぬくと生きている自分に何ができるのだろうか。悶々と考えていたとき、研究室の一人の先生に言われた。「あなたはサイエンスをするために大学院にきたのだから、それ以外のことをするべきではない」。研究者は目の前で起きている出来事に眼をつぶり、自分の研究の進展のみを考えなければならないということか？自分が目指している世界はそんなものだったのか？疑問や迷いが沸き起こった。そんなとき「研究者だって今を生きる一人の人間として、少しでも世界がよくなるように動くのは当然だ。」と言ってくれたのは、研究の世界でも頭角を現し始めていたJSAの仲間たちだった。この言葉に救われた。

あれから10数年たった今、「研究者だって」ではなくて、むしろ研究者だからこそ言えること、言うべきこと、やらねばならないことがあると強く思う。とはいえ、世の中で起こる問題は様々な分野が複雑に絡み、一人ではとても太刀打ちできないことが多い。だからこそ、多様な背景を持つ科学者が集い、各々の良心に従い、知恵と知識を寄り合わせて力を生み出すことが大事なのだと思う。JSAはその貴重な場である。